

研究発表メディアとしての図書の機能

The Functions of Scholarly Books in the field of Japanese
Literature, Economics, and Medical Science

真 弓 育 子

Ikuko Mayumi

Résumé

This paper clarifies the purpose of researchers who write scholarly books. Analyzing contents of scholarly books in the field of Japanese literature, economics, and medical science, the relations between functions of scholarly books and characteristics of research fields are examined.

The main results are as follows;

- 1) In the field on both Japanese literature and economics, most scholarly books are written by single authors. They use books as the media to publish results of their own researches carried out for more than ten years.
- 2) In economics, researchers use books as the media to review the fields. These books are written by more than one authors. Contents of those books consist of independent topics based on their research results in many case.
- 3) In medical science, researchers do not use books but scholarly journals to publish their research results. Books are used as the media to sum up knowledge of the field. These books are written by multiple authors who research different themes, and usually are functioned as textbooks for basic education.

- I. 研究発表メディアとしての図書
- II. 図書執筆の目的に関する調査
 - A. 目的
 - B. 方法
 - C. カテゴリー
 - D. 対象
- III. 図書執筆の目的に関する調査結果
 - A. 国文学研究

真弓育子：愛知淑徳大学文学部図書館情報学科専任講師，愛知県愛知郡長久手町片平 9
Ikuko Mayumi : Full-Time Lecturer, Department of Library and Information Science, Aichi Shukutoku
College, 9, Katahira, Nagakute-cho, Aichi District, Aichi Prefecture.

研究発表メディアとしての図書の機能

B. 経済学

C. 医学

IV. 研究分野の特徴と図書の機能との関係

A. 図書の執筆状況と執筆目的

B. 発表メディアからみた研究成果の発表活動

I. 研究発表メディアとしての図書

研究者はその研究成果を発表する際に、図書、雑誌（あるいは雑誌論文）、学位論文などのさまざまな発表メディアを用いるが、どの種の発表メディアを主に用いるかは、その研究分野の性格と関係していると考えられる。

筆者はすでに、研究分野と発表メディアの関係について、国文学研究を対象として調査を行ってきた¹⁾。その主な結果として、国文学研究においては多年の研究による大部な成果は図書に発表し、短期間の研究成果は雑誌に投稿するといった研究歴による発表メディアへの投稿配分が行われていることが明らかになっている。

これは、国文学研究では長年の思索によって文学作品を解釈することがその主要な研究活動の目的であることと関係している。つまり、短期間の研究による成果は図書に発表するほど多量ではないため雑誌論文として発表し、長期間の研究による大部な成果は図書を用いるといった方法を取っているためと考えられる。

この様に、研究分野あるいは研究傾向とその成果を発表するメディアとしての図書や雑誌の特徴とは何らかの関係があると考えられる。

従って、同じ種類の発表メディアに焦点を当てた場合には、それをを用いる分野によってその機能や特徴が異なってくると考えられる。

本論は、発表メディアの中から図書を選び、異なる研究傾向をもつと考えられる国文学研究、経済学、医学の3分野を対象に、研究者が研究成果を図書というメディアを用いて発表する目的について調査する。さらに、その調査結果から、研究分野の特徴と各分野での発表メディアとしての図書の機能および構造との関係について検討する。

II. 図書執筆の目的に関する調査

A. 目的

調査の目的は、“研究者の研究発表メディアとしての

図書の機能”を明らかにすることである。その調査方法としては、研究者がその研究成果をどのような意図で、図書というメディアを用いて発表するかについて、著者に直接インタビューすることが最適であろう。また、出版社からの勧めによって研究者は図書を執筆する機会が多くなれば、出版者に直接尋ねることも必要となろう。しかし、このような方法を採用する前に、すでに執筆された図書を対象に調査し、ある程度の子測をつけることが必要であると考え、今回の調査では図書を対象にその内容を分析することから始めることとした。

B. 方法

図書の各部分を情報源として、以下のような内容について分析を行なった。

〈情報源〉	：	〈調査内容〉
まえがき・序	：	図書執筆、出版までの経緯など
あとがき	：	図書執筆、出版までの経緯など
本文の構成	：	分担共同執筆か論文集かについて
執筆者一覧	：	著者の属性（年齢、所属）
引用文献欄	：	自著引用の割合
初出一覧	：	過去の研究成果の利用

まえがきやあとがきでは、研究者自身が執筆の目的について直接述べる可能性があると考えられるため、その全文を分析対象とした。また、その中で出版社からの執筆依頼について言及しているか否かを調べることとした。

複数の著者による図書の場合には、本文の構成を見ることから、複数の著者による共同作業から図書が執筆されているのか、各著者が単独で執筆したものをまとめた論文集のような内容をもつ図書であるのかの区別を、詳しく調べることとした。

図書の巻末に記載されている執筆者一覧からは、研究者の研究歴や研究環境を調べ、記載されていない場合には、「研究者研究題目総覧」などで補うこととした。

本文中、章末、巻末などに記載されている引用文献欄、あるいは初出一覧をみることから、研究者がどの程度自

分の研究成果に基づいて図書を執筆しているかについて調べることにした。

C. カテゴリー

今回は、図書の内容から、研究者の図書執筆の意図を類推する方法をとるため、調査内容の説明の中でも触れたように、図書の各部分を対象とした内容分析を行う。従って、分析の観点を明確にするため、分析の枠組みとして“執筆状況（単独著作か、複数著者による著作か）”と“図書執筆の目的”というカテゴリーを設定した。

1. 執筆状況

図書という同じ形態をもつものにも、その執筆状況からみればその内容は多様である。つまり、図書を一人の著者が執筆する場合と、複数の著者が共同して執筆する場合、さらに単独で執筆した個々の論文を編者が図書という形にまとめる場合とでは、その図書の性格は異なっていると考えられる。そこで、図書を執筆状況によって、単独著作と複数の著者による著作とに大別し、それらに単独著作と複数の著者による著作とに大別し、それらに以下のような定義と解釈を与え、図書を分析することにした。

a. 単独著作

研究者が単独でその研究成果を図書として発表したもの。この場合には、複数の著者による共同研究といった知識の共有という過程から生まれるのではなく、研究者個人の内部での研究成果の積み上げをまとめたものであると考える。

b. 複数の著者による著作

(1) 複数の研究者が共同で研究した成果を図書として発表したもの。研究過程が複数の研究者によって共有され、その中で研究成果をまとめたものであると考える。

(2) 各研究者が分担執筆を行ない、他の部分とは直接関連性を持たない内容であるもの。各研究者の研究成果が分野の範囲を構成する状態にあるため、各研究者による分担部分が分野を構成するような形で配置されているものとする。

(3) 書名に示されたテーマに各研究者の執筆部分が何等かの関連性をもっているが、各部分は独立し、体系的には構成されていないもの。分野自体が体系的に構成されていない状態にあり、研究者間での知識の共有はなく、単に論文を集めた論文集と同じ性格を持つもの。

以上のような定義と解釈をもとに、執筆状況について検討を行なう。

2. 図書執筆の目的

執筆の目的についても、以下のようなカテゴリーをもとに分析する。

a. 研究の集大成

長年の研究活動をもとに個人で研究成果をまとめあげることを目的とする。

b. 研究分野の体系化

分野の知識の整理と体系化を目的とする。

c. 基礎知識の普及

定着した知識を初学者へ普及することを目的とする。

D. 対象

国文学研究分野の図書は、「国文学年鑑」1985年版から、経済学分野の図書は「経済学文献季報」1985-86年版、医学分野の図書は「医学中央雑誌」1985-86年版から、無作為に抽出した。

調査対象として抽出した図書について、国文学研究資料館、慶応義塾大学三田情報センター、同医学情報センターで現物にあたって調査を行なった。しかし、各館に所蔵されていないものや、貸出中のものがあり、最終的には国文学研究 56 件、経済学 69 件、医学 60 件の図書を調査対象とした。

III. 図書執筆の目的に関する調査結果

各分野の図書をまず執筆状態のカテゴリーを用いて分け、単独著作と複数著者による著作各々について、さらに執筆の目的のカテゴリーを用いてまとめた。

なおこの他に、出版社、物理的特徴、版の書誌の来歴、引用文献・参考文献・注記の各形式、索引の有無などについても調査することにより、各分野の特性について詳しく検討することを試みたが、今回の分析の焦点を執筆の目的に置くため、これらは分析対象からは省くこととした。

A. 国文学研究

国文学研究の場合、責任表示は多様であり、以下の表示も、“著”と同様に研究成果であると考えた。

校注/校合：他の伝本と比べ合わせて正しいものにするため、文字や文句などをなおすこと。

校注：校訂と注解のこと。

注解：注を加えて本文の意味を説明すること。

研究発表メディアとしての図書の機能

国文学研究分野の図書を執筆状態で分けた結果、以下の通りである。

〈執筆状態〉	〈件数 (%)〉
単独著作	34件 (60.7%)
複数著者による論文集	9件 (16.1%)
史料の影印など	13件 (23.2%)
合計	56件 (100.0%)

単独著作が全体の6割を占めた。複数著者による著作では、共同執筆はなく、すべて論文集であった。しかし、史料影印などについては、書誌事項として、史料編集所、図書館、文庫、宮内庁、などの団体名に“編”が付与された形をとっているものも含まれていたが、内容を調べた結果から以下のような内容であることが判明した。

影印：原本を写真にとって、複製印刷したもの。

翻刻：本をそのままの内容で組み、再び出版したものの。

複製：以前と同じ体裁の版をつくって原本どおり複製したもの。

これらは、研究対象や研究材料の提供を執筆の目的としているため、研究成果の発表としての出版としては扱わなこいとされた。

次に、執筆状況によって分けた結果を示す。

1. 単独著作

a. 執筆目的

執筆目的について明示していた24件のうち、23件が過去の研究の集大成であると述べている。そのうち初出一覧が明示されていた15件をみると、過去4年間で53年間にわたって発表した主に雑誌論文をもとに図書を発表していることがわかった。

また、出版社からの出版依頼について述べていた23件のうち、著者自身から出版社へ出版依頼したと述べていたのが14件(60.9%)、逆に出版社から研究者へ出版依頼したものが9件(39.1%)であった。

b. 著者

著者の属性をみると、平均年齢が56才、最高が83才、最年少は33才であった。特に33才、38才の著者は、上司の教授から薦められて図書を発表したと述べていた。

所属が判明したもののうち、その半数が私立大学の教授であり、その他は国立大教授、助教授、私立大助教授、短大教授であった。

なお、過去の図書発表数について、執筆者一覧から

分析したところ、少なくとも1冊、多い場合には16冊を執筆しており、平均すると2.3冊の図書をすでに発表していることになる(但し、この場合は単独著作に限っていない)。

2. 複数著者による著作(論文集)

a. 執筆目的

執筆の目的とその件数は、以下の通りであった。

研究会の報告：3件

同一テーマについて複数の研究者が研究会を開き、その場で担当者が発表したものをまとめて報告する。科研費などの研究助成金を受けた研究の報告書として出版。

講演内容の出版：2件

文化教室などで講座として発表した内容を出版。

共同研究のまとめ：1件

同研究室内での共同研究の成果を発表。

論文集：1件

同一テーマに関して論文を提供。

記念事業の一環：1件

退官記念論文集や、研究会の記念事業として出版。

b. 著者

平均著者数は12名、40人が最高であった。

3. 国文学研究分野における図書の特徴

(1) 一つのテーマに関して長年研究を続け、研究者個人の中で研究成果が積みあげられていく文学研究では、個人の解釈を他の研究者と共有して、共同研究していくといったことは稀である。個人が長年積み上げた大部な研究成果をまとめて発表するために、図書という形態の発表メディアが用いられていると考えられる。

(2) また、大部な研究成果は初出一覧の分析から、過去何十年間という長い研究歴の中で発表してきた論文がもとになっていた。この結果は、国文学研究者の生産性に関する調査²⁾から得られた、図書を多く執筆している研究者は雑誌論文も多く執筆しているという結果とも関連する。

(3) 先の生産性に関する調査でも、図書の場合は、40才未満から60才代まで増加傾向を示し、60才代が最も高い生産性を示していた²⁾。今回の調査結果でも、単独著作の場合、研究者の平均年齢は56才であった。この点でも、図書の執筆には一定の研究歴を必要とすることが明らかにされている。

(4) 先の生産性の調査結果から、分担執筆する場合の共著者数が多くなれば多くなるほど、分担執筆ではあるが

複数の図書を生産しており、共著者数が少なくなればなるほど数冊の図書しか生産していないという傾向が明らかになった²⁾。しかし、本調査で分担執筆の図書の内容を詳しく分析したところ、共同研究の結果を図書にまとめたものは1件しかなく、その他は研究会の報告、記念事業の一環などの目的で、複数の著者が各自の論文を提供し図書の形にしたものがほとんどであった。この様に、国文学研究では、単独著作と複数の著者が執筆した図書とでは、その執筆の目的が非常に異なっている。従って、今後図書の生産性を扱う場合には、単独著作の図書と分担執筆の図書という区別を、その内容の点からも考慮していく必要がある。

B. 経済学

経済学分野の図書を、執筆状況で分けた結果を以下に示す。なお、翻訳書は研究成果の発表として含めるが、オリジナルの図書とは区別した。

〈執筆状況〉	〈件数 (%)〉
単独著作	33件 (47.8%)
共同著作	6件 (8.7%)
複数著者による論文集	17件 (24.6%)
翻訳書	13件 (13.8%)
合計	69件 (100.0%)

1. 単独著作

a. 執筆目的

執筆目的を明示していた25件のうち、研究のまとめを目的としたものが16件で、その中には、科研費などの助成金を受けた研究の報告書として出版したものや、理論の体系化を目指していると述べたものもあった。また、以前発表した論文を圧縮して執筆したと言及しているものも含まれていた。さらに16件のうち、初出一覧が明示されていた10件をみると、過去2年から36年間に発表した平均9.8件(最低3件, 最高16件)の雑誌論文を加筆、修正して執筆したと言及していた。

残りの9件は、基礎知識の提供を目的としたもので、大学の講義ノート、テレビの講座などをもとに、初学者向けのテキストを出版していた。これらの多くには、版の来歴があり、基礎知識の提供といっても、経済学では常に最新の情報に更新する作業が必要とされていると考えられた。

2. 複数の著者による著作

a. 執筆目的

経済学では、複数の著者による著作はその執筆目的か

ら、2種類に大別することができた。

そのひとつは、研究者2名による共同執筆であった。これらの執筆目的は、テキストとしての使用を目的としたものが4件、研究会の報告を目的としたものが1件、分野の体系化を目的としたものが1件であった。

第1著者と第2著者を合わせた平均年齢は47才で、最高71才、最年少が35才であった。所属は、官庁所属者が1名のみで、その他はすべて大学所属者であった。

もう一つは、複数の著者による論文を集めた論文集であった。その執筆目的の内訳は、以下のとおりであった。

古希記念、学部創立記念論文集として:	4件 (23.5%)
研究会の報告のために:	3件 (17.6%)
分野の体系化を目指して:	3件 (17.6%)
テキストとして:	1件 (5.9%)
企画番組の内容をまとめた:	1件 (5.9%)
基準書、社史、年鑑として:	5件 (29.4%)

著者の人数は、平均13名で、多い場合には40名による論文集であった。所属は9件(全体の52.9%)が大学で、官庁、企業が各々4件(23.5%)づつ、その他は経済評論家、経済問題研究者であった。また、編者は大学、企業、官庁などの団体が11件、個人が6件であった。

3. 翻訳書

翻訳書13件のうち、8件(全体の61.5%)が単独翻訳、5件が2名から6人による翻訳であった。

所属は、7件(全体の53.8%)が大学(教授)、その他は企業、官庁、研究所(顧問)であった。

翻訳の原典は、古いもので1970年の出版、最新のものが1984年出版のものが訳されていた。なお、1924年出版のものを翻訳していたものが1件あったが、これはすでに部分訳が出版されていたが、出版社から全体訳を依頼され、出版したものであった。

原典の言語は、1件のみがドイツ語で、その他はすべて英語であった。

4. 経済学分野における図書の特徴

(1) 経済学においても個人の研究者の中での、研究成果の積み上げが見られ、これは、経済学の研究方法も文学研究のような解釈の部分を持つためであると考えられる。

(2) 初学者向けの入門書が単独著作として発表されているのは、基礎知識の整理が行なわれ、その普及が必要とされているため、と考えられる。

(3) 複数の研究者が分担執筆する論文集のなかにも分野の体系化を目指していると述べているものもあり、多量

研究発表メディアとしての図書の機能

に発表される論文をまとめ、その時点での体系化が求められていると考えられる。

(4) 翻訳書のうち、その多くが研究者個人による単独翻訳であり、大学所属の研究者が半数以上を占めていた。これは、日本の経済学の発展のために海外の研究成果の導入が積極的に行なわれ³⁾、その一環として翻訳活動も盛んに行なわれてきたことと関係していると考えられる。つまり、経済学においてこの翻訳活動は、海外の文献を紹介し、その解釈を行なうという研究活動の一環として認められ、研究成果の発表メディアである図書を用いて、現在も盛んに行なわれていることを示していると考えられよう。

C. 医学

医学分野の図書を、執筆状態で分けた結果は以下のとおりである。この中で資料とは、技術基準に関する図書で、病状の程度やそれに適した治療方法の基準を定めたものであった。

〈執筆状態〉	〈件数 (%)〉
単独著作	12件 (20.0%)
複数の著者による論文集	40件 (66.7%)
翻訳書	7件 (11.7%)
資料	1件 (1.7%)
合計	60件 (100.0%)

1. 単独著作

a. 執筆目的

医学分野の図書における単独著作の目的は、次に述べる複数の著者による論文集と同様に、基礎知識の普及と最新情報の整理の2種類に大別できた。

しかし、単独著作の場合には、基礎知識や技術の提供を目的にしたものが11件あり、その大半を占めた。これは、初学者、医学教育課程の学生向けテキストで、その本文は問答式や表形式になっているものが多かった。また、臨床医が診療する際に役立つものや、症例や図入りで詳しい解説が付いている、臨床医向けマニュアルもあった。一方、最新情報の整理を目的としたものは、1件しかなかった。

b. 著者の属性

平均年齢は56才で、最高83才、最年少33才であった。このうち33才と38才の研究者は、上司の教授から薦められたと述べている。

所属は、ほとんどが大学所属者で、1名のみが国立の医療機関のセンター長であった。

2. 複数の著者による著作

a. 執筆目的

基礎知識や技術の提供が30件、最新情報の整理や紹介を目的としたものが10件であった。特に後者には、前年度の文献を複数の研究者が分担してまとめ、再編成したものや、特定分野（たとえば血液学、免疫学）に関する事典と同じ内容のものや、学会の会議録も含まれていた。

b. 著者の属性

一冊あたりの著者数は、平均20.2名と非常に多く、最も多い場合には70名による分担執筆であった。従って、執筆者一覧もなく、年齢については調べられなかった。所属は、大学所属者が大半を占め、病院所属者だけの執筆は4件しかなかった。

3. 翻訳書

a. 執筆目的

海外のテキストやマニュアルの紹介によって、基礎知識や最新の情報を提供することを目的としていた。

b. 著者の属性

著者数は一冊あたり平均6.1名で、最高11名の研究者による翻訳書があった。所属は、すべて大学であった。

c. 原典

1978年から1985年出版の英語の原典を翻訳していた。

4. 医学分野における図書の特徴

(1) 複数の著者による分担執筆の図書では、最新の情報をまとめて提供することが目的とされているものがあり、これは医学分野が扱う範囲の広さは、もはや単独で研究することはできなくなっていることを示していると考えられる。つまり、新しい情報は論文として刻々と発表されるが、その量は膨大で個人がすべてを読むことができない状態にあるため、複数の研究者が自分の専門のテーマに関して分担執筆し、それを体系的に編集したレビューのような役割をもつ図書が発表されていると考えられよう。

(2) 医師が診療の際に役立つマニュアルや手引書などが多く発表されていることは、医学が学問というよりも実学的な面が強いという点とも関係していると考えられる。つまり、医学分野の研究者にとって、医師という技術者に対して最新の知識や技術を提供することも、研究活動の目的の一つとなっていると考えられる。

第1表 執筆状況と執筆の目的

執筆状況	著者の属性	執筆目的	内 容	責任表示	分 野		
					国	経	医
					文	済	学
単 独 著 作	大学所属者 研究所 官 庁 経済評論家	研究の集大成 研究分野の体系化	書き下ろし/加筆, 修正 論文の圧縮/加筆, 修正	著/注釈/校合 著	■	■	■
		最新情報の提供	翻訳	訳		■	
		基礎知識の提供	講義ノートのまとめ (テキスト) 経験のまとめ (マニュアル)	著 著		■	■
複 数 の 著 者 に よ る 著 作	大学所属者 研究所 官 庁 経済評論家 医 師	共同研究のまとめ 同一テーマの論文集 研究分野の体系化	書き下ろし テーマに関連した論文の提供 専門分野を分担執筆	共著 共著 (分担) 共著 (分担)	■	■	■
		最新情報の提供	研究会の報告, 学会の報告 翻訳	編 (共著) 共訳 (分担)		■	■
		基礎知識の提供	シンポジウム, 教養講座の収録 講義ノートのまとめ (テキスト) 経験のまとめ (マニュアル)	共著 (分担) 共著 (分担) 共著 (分担)	■	■	■

IV. 研究分野の特徴と図書の機能との関係

A. 図書の執筆状況と執筆目的

分野別に図書の執筆の目的についてみてきたわけだが、ここでは、執筆状況と執筆の目的というカテゴリーから3分野の結果を再検討した。第1表は、執筆状況ごとに、執筆の目的、図書の内容、書誌事項での責任表示、該当分野（数量的な結果を参考にし、各項目に該当する目的を明示していた分野に ■ 印を付けた）についてまとめたものである。

研究者が単独で図書を執筆し、執筆する目的には、

- (1) 研究者個人での研究成果の集大成を発表する場合、
- (2) 研究分野内での知識の集積の結果を分野の体系化のために発表する場合、
- (3) 初心者向けに基礎知識や最新情報の普及を目的として図書を発表する場合、

とがある。これらの目的は何れも、研究者個人の内部での知識の集積が必要とされるという点で共通する。そのため、どの分野の図書においても、またその執筆内容は異なるろうとも、著者である研究者は何れも研究歴が長く、過去に何冊かの図書を発表した経験を持っていた。

しかし、観点を変えて分野ごとに見てみると、国文学研究では、単独著作の大半が研究の集大成であることが

明らかにされ、国文学研究において単独著作として発表された図書というメディアは、研究者個人での研究成果の発表の場として機能していると考えられる。つまり、国文学研究では、研究者個人の研究対象や研究テーマが分野全体を構成している状態にあるのではなく、個人の研究範囲が独立している状態にあることから、研究者個人の研究成果を発表するメディアとしての図書の機能が存在していると考えられよう。さらにこのことは、複数の著者による執筆によって発表された図書の場合を見ても、国文学研究では共同研究の成果を発表したものは非常に少なく、各研究者が同一のテーマに関して執筆した論文集が多く、その執筆目的も学部創設記念や、退官記念といったもので、研究分野内での知識の集積を意図したものではなかったことから明らかである。また、国文学研究が、ジャンルや時代によって枠づけられているにもかかわらず、各研究者による研究成果によって、分野や理論のまとまりがつきにくいといったことと関係しているとも考えられよう。

また、初学者への基礎知識の普及を目的とした図書が研究者によって発表されていることは、「源氏物語を読む」といったタイトルで新書や文庫として文学作品の簡単な解釈を執筆したものが、文学愛好者などの一般読者によって広く読まれていることからわかる。しかし、

研究発表メディアとしての図書の機能

本調査で調査対象を抽出する際に用いた国文学研究の二次資料には、権威ある研究者が選択した純粋に研究文献であるものだけが掲載されている。このような研究文献に対する格付けが研究者自身によって行なわれている国文学研究においては、基礎知識の普及という目的は、研究結果の発表メディアとしての図書の機能には含まれないことになる。

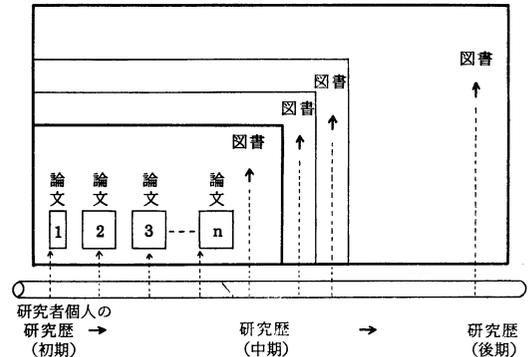
一方、医学では、研究の集大成を目的とした執筆はまったくなく、単独著作でさえ基礎知識の普及を目的としたものが大半を占めていた。また、複数の研究者による著作の場合も基礎知識の普及が意識され、さらに最新の情報をまとめるといった分野の体系化を目指すものが多くあった。これは、新しい研究成果は論文として発表されており、図書という出版形態は、最新の情報を発表するには適さないことから研究成果の発表メディアとしての機能を失いつつあると考えられる。その結果、複数の研究者が自分の専門のテーマに関して分担執筆し、それを体系的に編集することで分野を概観するような内容をもつ図書が発表されていると考えられよう。また、医学が専門家だけのなかで留まらず、初学者まで普及されることが望まれており、そのため国文学研究とは対象的に、研究者個人での研究成果の集積よりも、医学分野あるいは「血液学」といった特定分野での基礎知識の整理が必要とされている。医学分野においては、研究成果の発表メディアとしての機能を失いつつある図書が、基礎知識の提供といった別の機能を持つようになったと言えよう。

そして、経済学に焦点を当てると、国文学研究と医学の両面を持つことが第1表からもわかる。単独著作には、研究の集大成といった個人での累積から、分野の体系化を目指すといった分野内での累積、そして初学者への基礎知識の普及をも意識した累積まで存在し、またこの傾向は、複数の著者による著作の場合にも見られた。これは、経済学が研究者個人の解釈が進められている部分と、複数の研究者間での研究の交流を必要とする部分とが存在するためと考えられよう。

B. 発表メディアからみた研究成果の発表活動

研究分野の特徴と発表メディアに関する分析をもとに、発表メディアと、研究分野の構造、研究者個人の研究歴の構造を関連付けてみることにする。

国文学研究を対象とした過去の調査結果から、国文学研究における研究者個人での発表活動における図書と雑



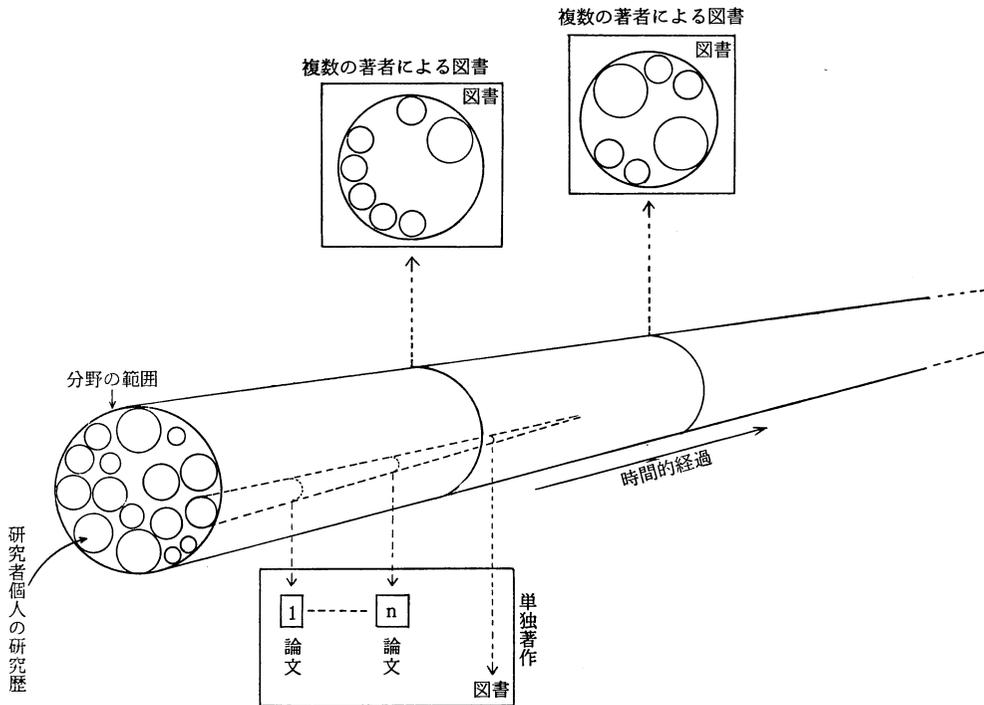
第1図 国文学研究における研究歴と発表メディアとの関連図

誌論文という2種類の発表メディアの関係は、ある程度明らかになっている。これに、今回の調査の中の単独著作に関する結果を加えて、国文学研究における研究歴と発表メディアの関連を示したものが、第1図である。

研究者個人の研究歴の流れの中で、研究成果の中間発表が雑誌論文となり、その雑誌論文をもとに図書が執筆されていることは今回の調査結果から明らかになっている。また、研究歴が長くなれば、発表に用いるメディアが雑誌論文から図書へ推移していくことは、数人の研究者の研究生涯を詳しく分析することから明らかになっている¹⁾。しかし、図のように雑誌論文がすべて次の図書の内容に取り込まれ、さらに後の図書の内容に取り込まれていくといった無駄のない累積がどの程度行われているかについては、さらに詳細な分析が必要である。

第1図のような研究者個人での研究成果の累積として、図書と雑誌論文が発表されているだけでなく、個人での研究成果の積み上げを行ないながら、研究者個人が集まって、研究分野での研究成果の累積として、図書を発表している状態を図示したものが、第2図である。この図は、今回の調査で、経済学と医学の複数の研究者によって執筆された図書の中には、分野の体系化を目指したのも含まれていることが明らかになり、さらに経済学では単独著作が国文学研究のように個人での研究成果の積み上げであることが明らかになったことを基にしたものである。

まず、中央にある大きな円筒は特定分野の範囲を示しており、さらに左から右への時間経過も示している。この大きな円筒の中に含まれている小さな円筒は、その各々が研究者個人の研究歴を表し、さらにその切断面積の



第2図 執筆状況からみた発表メディア

広さは、各研究者個人の研究対象領域の広さに比例している。小さな円筒の各所から下に向けられた矢印が示すものは、先の第1図でみたような研究者個人の発表活動である。つまり、小さな円筒と下の四角い枠は、研究者個人の研究歴とその間に発表された雑誌論文やその論文を基にした図書を示している。また、大きな円筒の各所から上に向けられている矢印が示す四角い枠とその中に含まれた点線で囲まれた円は、円筒を切断した時点で発表された複数著者による図書の構成であり、図書の構成がその時点の分野の状態を反映しているということを示したものである。複数の小さな円筒が大きな円筒の形に沿って存在する場合には、分野内で研究者個人の成果がまとめやすくなっている状態であり、その状態を反映したかたちで、複数著者による「・・・学入門」や「・・・学概説」といった図書が発表されることになると考えられる。これは、今回の調査の中で経済学分野の図書においてみられたような分野の体系化を反映した図書の場合と考えられる。また、切断面に小さな円が多く存在すれば、その分野では分業化が進んでおり、このような状態は医学分野の図書において見られたように、多数著者

による分野の解説書やハンドブックが発表されると考えられる。

しかし、国文学研究ほど、経済学や医学における分野の特徴と発表メディアとの関係が明らかにされていないため、この図はいくつかの課題を抱えている。

仮に、経済学と医学を比較すれば、各々の分野の切断面には、どの程度の細かさで小さな円筒の切断面がみえるのか、あるいは図では表現していないが、円筒と円筒の重なりはないのかといったことが考えられる。また、そのような切断面が表す分野の構造と、分野の体系化を目的として執筆される図書という発表メディアとの関連についても、今後明らかにしなければならない。

また、国文学研究、経済学、医学という3分野の特徴は、各々の図書の機能上にもみることができたが、今回の調査は、図書という発表メディアの一つだけに焦点をおいて、研究分野の性格と発表メディアの関連性を検討した。国文学研究や経済学の図書が雑誌論文をもとにまとめられたものであるという結果からも、今後の検討課題として、複数のメディアを同時に捉え、発表メディアの特徴を検討することであると考える。さらに、図書を

研究発表メディアとしての図書の機能

研究成果の発表メディアとして利用している研究者や図書出版の仕組みに直接関与している出版社にも、今回の結果をもとにインタビューを行ない、発表メディアの機能に関するより新しい観点を見い出したいと考えている。

- 1) 真弓育子. “国文学研究における発表メディアの特徴”. *Library and Information Science*. No. 23, p. 165-178 (1985).
- 2) 倉田敬子; 真弓育子. “国文学研究者の生産性”. *Library and Information Science*. No. 24, p. 133-144 (1986).
- 3) 奥野正寛; 佐和隆光; 林敏彦. “座談会 日本の近代経済学”. *経済セミナー*. No. 286, p. 16-34 (1978).